

## 趣旨説明…東アジアにおける異文化理解と受容の諸相

人文社会学研究所所長 宇佐美一博（2021.3まで在任）

### 公開講座

久住祐一郎先生（豊橋市美術館学芸員）

「近世日本における行列」

大形徹先生（大阪府立大学名誉教授・立命館大学特別招聘研究教授）

「エジプトと中央アジアのミイラの復活観念が中国の仙人を生み出したのでは？」

「パルメット、鹿角文様と羽人と龍」

小林武先生（京都産業大学名誉教授）

「中国法は公平か―古典学者章炳麟の中国法批判―」

静慈圓先生（高野山大学名誉教授・第519世「法印」）

「空海と現代中国の仏教」

みなさん、こんにちは。愛知大学人文社会学研究所長の宇佐美一博と申します。

まず愛知大学人文社会学研究所の紹介から始めさせていただきます。

愛知大学人文社会学研究所は2015年4月に設立され、ほぼ6年がたちました。本研究所の特徴は、人文科学と社会科学、及び双方にわたる学際的分野の基礎研究を行うところにあります。その成果は、今回のようなシンポジウムやプロジェクトの報告書、さらには機関誌「文学論叢」によって広く一般に公表されています。

これから「東アジアにおける異文化理解と受容の諸相」というテーマをめぐって4人の講師の方々の公開講座を視聴していただきます。本来ならば対面で6月、7月、10月、11月に開かれる予定でしたが、新型コロナウイルスのため、動画を撮影し、一般公開するという方法に変更になりました。(1)

では、まず東アジアとは、どの地域を指すのでしょうか。

一般的には日本、中国(1国2制度…中華人民共和国、香港)、台湾(中華民国)、朝鮮半島の韓国(大韓民国)、北朝鮮(北朝鮮人民共和国)の地域を東アジアと呼んでいます。

東アジア文化を研究するには、日本、中国、台湾、韓国・朝鮮それぞれの国々が、異文化をどのように理解し受容したのか、理解と受容の仕方を比較する必要があります。違いがあれば、なぜそのような違いが生じたのか、その理由も研究する必要があります。また、文化の交流がどのように行われたのか、西洋の文化との関わりも視野に入れつつ、東アジアにおける文化交流の実態を解明することも重要です。このような研究は、東アジア文化の基礎研究と言ってよいと考えます。

なぜこのようなテーマを設定したのか、その意図をもう少しお話しておきたいと思えます。

日本と中国、日本と韓国、日本と北朝鮮の関係は、現在政治的・経済的にはかなり緊迫した状況にあります。一般の人々は言うに及ばず、私が接しております大学生の間でも、嫌中、嫌韓の感情をもつ学生が多くいます。このような時こそまず相手の文化及びお互いのこれまでの関係を知る基礎的な研究が必要ではないでしょうか。

異文化理解の研究・教育といえは、日本では英語圏との関係が中心で、現在英語は小学校から教えることになってきます。これに対して、東アジアにおける異文化理解についての研究・教育は、小・中学校ではまだほとんど行われていない状況だと言っても過言ではありません。

今回の4人の講師の方々のご講演は、東アジアの中の、日本、中国の異文化理解と受容及び交流の諸相に焦点を当てたものですが、これらの講演によってお互いの文化の違いを知るとともに、お互いの文化の緊密な関係をも再認識し、ひいては現在の日中関係を考え直すきっかけにも繋がるものと考えます。

東アジア地域は、共通点として漢字を使うことが大きな特徴として挙げられます。東アジアは漢字文化圏といわれています。日本、中国、台湾では漢字が使われています。韓国・朝鮮も朝鮮時代は漢字が使われていました。現在はハングルで表記し、漢字は使われていませんが、単語は漢字をもとに作られた漢字語が数多くありますので、韓国・朝鮮も漢字文化圏に入ると考えてよいと思えます。

東アジア地域は以上のように漢字文化圏と呼ばれ、同一性が強調されがちですが、しかし各国それぞれ異なる点もあります。例えば、国家を治める体制について見てみますと、各国それぞれかなり違ってきます。

中国は共産党が治める体制で、党员以外は選挙権が認められていません。香港は1国2制度という方法によって治められてきましたが、最近有名無実化し、反対運動が起こっています。

台湾は長く国民党が治めてきましたが、民主化され、現在は民進党の蔡英文総統が政権を担当しています。総統から市町村の議員まで、選挙で選ばれます。

韓国は大統領制、北朝鮮は、金一家が代々後を継ぐ体制です。

日本は議院内閣制によって国を治めています。

東アジアはすでに述べたように「漢字文化圏」と呼ばれますが、使われている漢字はそれぞれの国によって異なります。

中国では簡体字、台湾では繁体字が使われています。日本の常用漢字と違う場合があります。例として日本語の「地図」という熟語を挙げてみます。

日本 —— 「地図」(常用漢字)

中国 —— 「地图」(簡体字)

台湾 —— 「地圖」(繁体字)

韓国・北朝鮮 —— ハングル「지도」(地図) ↑ 漢字語

さらに日本には国字という独自の漢字もあります。

「働」、「辻」、「榊」、「峠」、「畑」、「躰(しつけ)」、「凧(こがらし)」、「凧(たこ)」、「凧(なぎ)」、  
「鰯」、「鯨(しゃち)」、「磨」、「糍(こうじ)」、「舩(せがれ)」

また、中国語と日本語、韓国・朝鮮語とは、文法の構造が違ってきます。

中国語は孤立語といわれ、文法の構造は英語と非常によく似ています。それに対して、日本語と韓国・朝鮮語は膠着語といわれ、助詞や助動詞をともなつて表現し、文法の構造は中国語と全く違います。

例として「登山」「乗馬」を挙げてみます。

中国語 —— 孤立語

「登山」(動詞V + 目的語O)

「乗馬」(V + O)

\* 英語、ドイツ語、フランス語 —— 屈折語

climb [ climbs climbed ] a mountain [ mountains ]

mount [ mounts mounted ] a horse [ horses ]

日本語、韓国・朝鮮語 —— 膠着語(語の順序や語形変化よりも、助詞、助動詞などの付属語によって文法的な関係を示す言語。日本語、朝鮮語、ウラルアルタイ語族)

日本語

「山に登る」(O + V)

「馬に乗る」(O+V)

韓国・朝鮮語(ハングル)

「산(山)에(に)오르다(登る)」(O+V)

「말(馬)을(に)타다(乗る)」(O+V)

最後に、文化交流史の重要性について述べておきます。

日本にとって、中国や韓国との交流の歴史にはどのような意味があったのか。よりよき関係を構築するためには、過去を振り返り、日本列島が中国大陸や朝鮮半島とともに織りなす海域世界がどのような歴史を歩み、その結果として今日の日本文化がいかにして形成されてきたかを知る必要があります。日本と中国の正式な国交は遣隋使・遣唐使から始まりましたが、894年、遣唐使が廃止され、1894年日清戦争が始まるまで、1000年にわたって正式な国交がありませんでした。本来ならその間に航海術が進歩し、交流が盛んになるはずですが、海上渡航禁止や鎖国で停滞してしまいました。しかし民間の商人や僧侶によって、海を越えて活発に、書画、書物、仏教などにおいて、多彩で豊富な交流が行われ、それらが日本で「伝統文化」と呼ばれているものを生みだすうえで決定的な役割を果たしました。「国家」や「領土」を基軸とする歴史認識を越えて、人・モノ(漢籍)・情報が移動・交流する場としての「海域」から東アジアを捉えなおすことが重要だと考えます。(2)

それでは、4人の講師の方々とそのテーマについて簡単に紹介させていただきます。

まず久住祐一郎先生ですが、現在豊橋美術館に学芸員として勤務しておられます。

「近世日本における行列」という題でご講演をお願いします。江戸時代の人々が鎖国政策の中でどのようにして異文化に接したのか。江戸時代を「行列の時代」とし、外国使節の行列に着目されたのが斬新だと思えます。

大形徹先生は、大阪府立大学を退官後、立命館大学で特別招聘研究教授を勤めておられます。

「エジプトと中央アジアのミイラの復活観念が中国の仙人を生み出したのでは？―パルメット、鹿角文様と羽人と龍―」という題で、中国の神仙思想を、東アジアより西のエジプトと中央アジアとの関わりに注目してお話させていただきます。

小林武先生は、長く京都産業大学で教鞭を執られました。

「中国法は公平か―古典学者章炳麟の中国法批判」という題でお話しさせていただきます。日本・西洋との関わりで見た近代中国の法制度の議論を、章炳麟という人物の中国法批判に焦点をあててその意義を明らかにしたもので、小林先生の最新の研究成果に基づくお話です。

最後の静慈圓先生は、高野山大学名誉教授で、最近第519世「法印」をつとめられました。

「空海と現代中国の仏教」という題でご講演をしていただきます。空海が唐に渡り、どのようなルートで西安にたどり着いたか、空海ロードの再現の話、高野山で中国人の僧を養成し、滅んだ中国密教を再興しようとする試み、新聞や雑誌では知ることが出来ない現代中国の仏教事情など、興味深いお話を聴くことが出来ます。

以上のテーマは、東アジアにおける異文化理解と受容の研究において初めて取り上げられたものばかりです。繰り返になりますが、これらの講演によってお互いの文化の違いを知るとともに、お互いの文化の緊密な関係をも再認識し、ひいては現在の日中・日韓関係を考え直すきっかけになればと願っています。

それでは4人の講師の方々のお話をお楽しみください。

注

(1) 本研究所初のこのような企画が何とか完成まで漕ぎ着けることができたのは、ひとえに講演をお願いした4人の先生及び動画の撮影・編集を引き受けてくださった上田謙太郎先生（本学文学部メディア芸術専攻所属）のご協力の賜物である。ここに深く謝意を表させていただきます。

(2) 東アジアの文化交流史の重要性については、まず以下の2冊を読んでみてください。

- 1、小島毅監修『東アジア海域に漕ぎだす1〜6』東京大学出版会 2013〜2014年。
- 2、森平雅彦・岩崎義則・高山倫明編『東アジア世界の交流と変容』九州大学出版会 2011年。